欅の木は、両手を広げ

樫の木は、両手を広げ　後編

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16937048

ダイの大冒険, マァム, ヒュンケル, ヒュンマ, ヒュンマフェス

完結編。
騒動の結末と、ヒュンケルがマァムにかけたかった言葉。

これでもかというくらい独自路線に走っている気がします・・・。

2022.2.5開催ヒュンマフェス・ウインター合わせ。
2022.3.21表紙差し替え。表紙の写真は、photoＡＣhttps://www.photo-ac.com/様でお借りしました。umo（ゆも）様の「樫の木と新緑」という作品です。

樫の木は、両手を広げ　後編

　陽が沈み、森が闇に包まれた。
　この日は、月は出ており、森の中にも薄明かりが届いていた。
　もともと、森に囲まれたネイル村で生まれ育ったマァムは夜目が効く。
　それに、彼らのテントから漏れる明かりが、宵闇の中、その存在を浮き上がらせていた。
　近くの村の住人は、夜の森には足を踏み入れない、と言うことを知っているのだろう。夕暮れ時よりも、彼らはむしろ警戒している様子が見られなかった。
　酒を酌み交わしているのだろうか、遠くから、談笑の声や足音も漏れ聞こえていた。
　マァムは正面から戦っても、多勢に無勢、不利だということはわかっていた。
　本当は、深夜、男たちが寝静まるのを待つべきなのだろう。しかし、そこまで待っていては、エリカの身に危険が及ぶ可能性が高い。これ以上は待てなかった。
　マァム一人で、大勢の男たちをかく乱し、確実にエリカを救助できること、そして、エリカの身の安全。そのバランスを考えると、陽が落ち切ったばかりのこのときしかなかった。
　マァムは、男たちの様子を注意深くうかがっていた。男たちが、テントからテントへと移動する様が遠目にうかがえた。
　そして、移動する人影がいなくなったのを見計らって、マァムは窪地に下りた。
　マァムは、テントの後ろと窪地の壁面の間に身体を滑り込ませると、大きく息を吸い、右の拳を引いた。
　そして、テントの柱に狙いを定め、一撃を繰り出した。
　鈍い音とともに、テントの柱にひびが入る。
　マァムは、手近な柱に、次々に拳を打ち込んでいった。
　柱が折れる鈍い音とともに、テントの天幕がばさりと落ちた。
　男たちの悲鳴が響き渡る。

「な、なんだ！？」
「敵襲か？」
「何も見えないぞ！！」
「ランタン消せ！燃え移るぞ！！」
「外に出ろ！」
　マァムは素早く移動をすると、他のテントの裏に回り、次々と潰していった。
　何が起こったのかわからない男たちは、うろたえ、右往左往している。
　マァムは、テントの背後から背後を潜り抜け、そうして、最後に残したままにしていたテントに駆け込んだ。
「エリカ！」
　マァムは叫んだ
　少女らしい後姿が消えたテント。ここに彼女が捕らわれているはずだ。
「・・・マァムちゃん。」
　聞き覚えのある声が返ってくる。
　だが、マァムは、ほっとすることもできず、テントの入り口で、その幕を翻したまま、絶句した。
「・・・何・・・。」
　エリカは、確かに、そのテントの中にいた。
　両手を後ろ手に縛られたまま、泣きはらした目で、マァムを見上げていた。
　しかし、テントの上部から吊り下げられたランタンの照らす光景は、マァムが想像もしていなかったものだった。
　そこにいたのは、エリカだけではなかった。
　いくつもの、色彩の異なる頭が見える。
　ざっと見ただけで、７～８人の少女たちが、そこにはいた。縛られてはいないものの、体を丸めてうずくまっている子や、床に倒れている子もいた。
　エリカよりも年上の、１７～１８歳くらいに見える娘もいれば、まだほんの少女にしか見えない子もいた。
　そして、その顔立ちや、髪の色から、明らかにロモスの者ではな

い娘さえもいた。
　マァムは吐き気がした。
　この娘たちを放ってはおけない。
　マァムは、少女たちに声をかけた。
「助けに来たわ！逃げるわよ、立って！！」
　マァムは、エリカを立たせると、その腕の縄を切った。万が一の時のために、小型のナイフは持ち歩いていた。
　そして、マァムは、おびえた表情の少女たちを鼓舞した。
「みんな、逃げるわよ！行きましょう！！」
　だが、少女たちは、うずくまったまま立ち上がらなかった。お互いに身を寄せ合って、おびえた表情を変えることもなく、丸くなっていた。
　マァムは戸惑った。時間がないのだ。
「どうしたの？逃げるのよ！！」
「やだっ！」
「怖い・・・怖い・・・。」
「いやっ！！」
　少女たちは、口々に恐怖や拒否の言葉を叫んだ。
　エリカは、不安げにマァムを見た。
「・・・マァムちゃん。」
　エリカはマァムのすぐそばで立ち上がっている。彼女だけなら連れてすぐ逃げられる。
　だが、おそらく、それなりの期間捕らわれたままになっていたであろうこの少女たちを見過ごすことはマァムにはできなかった。
「誰だ！誰かいるのか？」
「侵入者か！？」
　マァムは、はっとして振り返った。テントの外から男たちの声が響く。
　見つかった。
　時間がない。
　マァムは、このテントに吊るされたランタンを見上げた。
　火でかく乱しようか。その隙に逃げることもできる。
だが、すぐに思いなおした。

そんなことをしては、ここにいるおびえた少女たちが巻き込まれる。火災で死んでしまうかもしれない。
　取れる手段はいくつもなかった。
　マァムは、唇を噛んだ。毅然とした目で、面をあげた。
「エリカ、みんなを逃がして。私が時間を作るわ。」
「マァムちゃん！？」
「大丈夫よ。あんな連中に負けない。
　それよりも、みんな！」
　マァムは少女たちに向かって叫んだ。
「逃げるのよ！！
　自分の足で！立って、逃げて！
　いい？
　逃げるのよ！」
　マァムは、そう言うと、テントの外に出ていった。
「マァムちゃん！」
　背後から、エリカの声が聞こえた。
　マァムが外に出ると、すでにテントの周りには、１０人近い男たちが集まっていた。どの者も、抜身の剣やナイフを手にしていた。
　テントから漏れた光がマァムを照らす。
　男たちの前に、逆光に照らされたマァムの姿が顕わになる。
　彼らは、マァムを見ると、目を丸くした。意外そうな声をあげる。
「・・・何だ、こいつは。」
「こいつが侵入者か？」
「・・・ずいぶんかわいいお客さんじゃねえか。」
「上玉だ。」
「俺たちに、かわいがってほしいのか？」
　男たちは、マァムを若い娘だとみて侮った。
　侮るような見下した目つきに、マァムを品定めする下品な視線。粗野な笑い声。
　マァムは虫唾が走った。
　男の一人が、剣を納め、マァムに近づいた。
「怖い顔するなよ、お姉ちゃん。あんたみたいな子なら歓迎する

ぜ。」
　そう言ってマァムに手を伸ばした。
　だが、その手は彼女に届くことはなかった。
　マァムは、勢いよくその手を払うと、男の腹に、強烈な膝蹴りを食らわせた。
「うぐっ・・・！」
　男がうめいて膝を折る。
「この女・・・！」
「ふざけやがって！」
　一瞬で、空気が変わった。
　男たちの目に危険な色が宿る。マァムに対する敵意が露わになった。
「あんたたちに、私が捕らえられると思っているの！？」
　わっと男たちの声が上がる。鬨の声が響く。
　マァムも身構えた。
　向かってくる男たちに、拳を、蹴りを繰り出し、次々に男たちを地面に昏倒させていった。
　その様に、初めはマァムを侮っていた男たちの顔色が変わった。
「・・・こいつ。」
「気をつけろ、手練れだ！」
　じりじりと、遠巻きにマァムを囲み、剣の切っ先を向ける。
　マァムは、男たちと対峙しながら、意識は常に背後のテントに向けていた。
—エリカ、お願い・・・早く逃げて・・・！
　テントの入り口の幕は落ちており、中の様子は見えない。
　だが、背後の少女たちの気配はなかなか消えなかった。
　少女たちが動けずにいることが察せられた。
　マァムは焦った。
　いつまで時間が稼げるか。自分一人でどこまで持ちこたえられるか。
　どの男たちも、剣を向けながらも、マァムの体にまだ傷ひとつつけられていない。その前に剣は落とされ、却ってマァムの攻撃を食らい、次々に倒されていく。

だが、何しろ、多勢に無勢だ。
　もともと、マァムのような武闘家は、一人で大勢の敵を相手にすることに向いていない。
　次第に、マァムの拳にも、疲れの色が見え始めてきた。
　マァムは迷った。
　逃げるべきか、どうするか。
　エリカひとり抱えて逃げることはできる。だが、そうしたらほかの少女たちはどうなるのだ。
　マァムの中の焦りと、不安が大きくなる。
—ダメだ、私ひとりじゃ・・・。助けを呼ばないと・・・。
　悔しさと、不安と、少女たちの身の安全への強い危惧が入り混じる。
　ここまでか。
　一時撤退。
　その言葉が脳裏をよぎったそのときだった。
「うわっ！」
　あらぬ方向から男の悲鳴が上がった。
　驚いて、マァムは、その声が上がった右の方向を見た。
　ほかの男たちも、手や足を止め、そちらを見る。
　光が走った。
　鋭い矢のような、細い光が、この窪地に向かって降ってきた。
　一瞬走った光の矢が消えると、またすぐさま、次の一撃が走り、光の軌跡を描いた。
「な、なんだ！？」
「魔法か？」
　その鋭く細い光の筋は、かつて、ロモスでポップが見せた集束ギラの光に似ていた。
　だが、マァムはすぐに気づいた。
—違う・・・。魔法力じゃない。
　光の矢が次々と注がれる。そのたびに、それに射抜かれた男が地面に倒れた。
「何者だ！」
「うわっ！！」

「おい、しっかりしろ！」
　男たちの混乱に拍車がかかる。
　マァムはその光景を呆然とした面持ちで見つめていた。
　男たちを射抜き仕留めていくこの光。
　マァムは気付いていた。
―これは、闘気だ・・・！
　次の瞬間、マァムの耳に、あり得ないはずの声が聞こえてきた。
「マァムっ！！無事か！？」
　マァムは耳を疑った。
　そんなことはあり得ない。
　だって、マァムは何も言ってこなかった。何も知らせなかった。
　それに彼は、体を壊しているのだ。もう戦士でもない。
　それなのに、どうして、いまここで、彼の声が聞こえるのだ。
　呆然とするマァムの目の前で、影が、さっと窪地に舞い降りた。
「マァムっ！！」
　まっすぐに彼女に向かって駆け寄るその姿。
　マァムは、両手で口を覆った。
　どうして。
　どうして来てくれたの。
　マァムの頭にその言葉が駆け巡った。
　マァムが声も出せずにいると、彼はマァムに駆け寄り、ほっと安堵の表情を浮かべた。
「よかった。無事だな。」
「・・・ヒュンケル。」
　マァムはようやく、その名を呼んだ。
　ヒュンケルは、すぐにマァムを背にかばうと、男たちに向き直った。
　マァムとは異なる、長身の、鍛えられた体躯を持つ、明らかに戦士と思われるその姿に、男たちの敵意が高まった。
「こいつ・・・！」
「叩き斬れっ！！」
　ヒュンケルは左手に持った剣を前に出し、その刃を下に下げたまま右掌を柄に当てると、男たちに狙いを定めた。

剣の柄と鍔のその十字から、白い光弾が走る。
闘気弾だ。
細く、威力を落としたものであるが、それは矢のように男たちの間を走り、数名の者を射抜いた。
男たちは、その攻撃に一瞬ひるんだが、すぐに体勢を立て直した。
「落ち着け！奇妙な技を使うが、どうせ一人だ！」
ヒュンケルは振り返らず、マァムに尋ねた。
「マァム、こいつらは。」
「盗賊団よ。」
「わかった。」
彼女の短い返事に、ヒュンケルはすぐに事情を察した。予想していたようでもあった。
だが、次のマァムの言葉は、ヒュンケルを驚愕させるのに十分なものであった。
マァムは、ヒュンケルの背後から彼に懇願した。
「ヒュンケル・・・後ろのテントに女の子が捕まっているの！エリカだけじゃない、何人もいるの！あの子たちを助けたいの！！」
マァムの言葉に一瞬だけ、ヒュンケルが息を飲む音がした。
だが、彼は、すぐに平静を取り戻すと、振り返らずにマァムに応えた。
「大丈夫だ。心配するな。」
その背中に、マァムは、かつて何度も戦場で見た、兄弟子の後姿を見た。鎧の魔剣を、魔槍をまとったその後ろ姿が今の彼と重なった。
大丈夫だ。
何度も聞いたその言葉が、マァムの胸にしみる。
根拠のない確信がマァムの胸に広がった。
ヒュンケルが来てくれた。もう大丈夫だ。
だが現状では、男たちの敵意の籠った眼差しが、ヒュンケルに注がれている。すでにマァムたちは取り囲まれていた。
男たちの一人がヒュンケルに切りかかる。
彼はその剣を、自身の剣で受け止めると、相手を蹴り飛ばした。

ヒュンケルの蹴りを受けて、斬りかかった男は背後に吹き飛ばされた。
　だが、思ったよりも、近くでその男は地面に倒れた。
　男の一人が声をあげた。
「まとめてかかれ！あの変な光に気をつけさえすれば、こいつの威力は弱い！」
　マァムは顔色を変えた。
　ヒュンケルの体は、今でも万全ではない。こんなに何人もの敵を相手にできるはずがない。
「ヒュン・・・。」
　だが、前に出ようとしたマァムの前に腕を出し、ヒュンケルは彼女を制止した。
「乗り込んできやがって、ただで済むと思ってんのか！！」
　その言葉に、ヒュンケルが唇の端をあげた。彼の面に上った不敵な笑みは、かつての不死騎団長を彷彿とさせるものであった。
「・・・お前たちのような無法者の集団に、無策で飛び込んでくると思うか・・・？」
　そう言うと、ヒュンケルは、もう一度剣を構えた。
　男たちが身構える中、闘気の矢が走る。
　だが、その光は、どうしたことか、上方に向かい、あらぬ方向へと飛んでいった。
　男たちは嘲笑した。
「どこに向かって・・・。」
　だが、その言葉は、ヒュンケルの声にかき消された。
　ヒュンケルは叫んだ。
「撃て！！」
　それが合図だった。
　次の瞬間。
　この窪地に向かって、無数の矢が降り注いだ。
「な、なんだ！？」
　右から、左から、複数の方向から矢が飛んでくる。魔法力や闘気ではない。
　現実の矢だ。

闇に包まれた森の中から、突然、獣が牙をむいたような錯覚に男たちは捕らわれた。
「ば、ばかな！」
「こんな田舎村に兵士がいるはず・・・。」
　矢は、次々と飛んでくる。
　あちこちの方向から。
　何度も、何度も。
　その射手の姿は、森に隠され見えない。
　何人いるのかもわからない。
　男たちは混乱に陥った。
　そして、彼らは見た。
　ヒュンケルの持つ剣の柄。そこに闘気が収束されていく。
　闇夜を切り裂くような鮮烈な光。
　今までの闘気の矢とはケタ違いに大きな闘気の光だ。
　細い闘気の筋でさえ、何人もの男を倒したのだ。
　あれをぶつけられたらひとたまりもない。
　男たちは蒼白になった。
「・・・う、うわ・・・。」
「マズイ・・・！」
　ヒュンケルは、手元に闘気の光を集めたまま叫んだ。
「頭（かしら）を出せ！お前たちでは話にならん！
　お前たちの頭はどこだ！！」
　そのまま、彼は男たちを睨み据えた。闘気を集束させたヒュンケルの手元の剣が、そのまま前に突き出される。
　男たちは、恐怖に駆られた。
　すると、少しして、彼らの人垣が割れた。
　その中から、ヒュンケルより少し年重（としかさ）の、だがまだ若い男が一人、前に進み出た。
　周囲の男たちが、戸惑い、ざわめく中、その男はヒュンケルに向かって言葉を発した。
「頭は俺だ。
　話を聞こう。」

ヒュンケルは、盗賊たちの頭だと名乗るその男をまっすぐに見据えた。だが、闘気の収束も止めず、剣も下げなかった。
　頭は、彼の意図を察し、手下たちに腕で示した。
「お前たちは下がれ。」
「でも。」
「早くしろ。あの一撃を浴びたいのか。」
　男たちは、しぶしぶ背後に下がった。
　頭の男は、ヒュンケルの様子を見ながら、背後の男たちに指示をした。
「剣を外せ。地面に置け。」
「えっ！」
「やれ。」
　男たちは、戸惑いながらも、それぞれ、持っていた剣を地面に置いた。
　頭の男は、ヒュンケルに向き直った。
「俺はこのままで失礼する。さすがにこいつらの前で丸腰では面子（メンツ）が立たない。」
「・・・いいだろう。」
　その言葉に、ヒュンケルも剣を下ろした。闘気を解く。
　盗賊の頭は、呪文を唱えた。
「レミーラ。」
　ふわりと、彼らの周囲が光で包まれた。照光呪文だ。
　しかし、その範囲は広くない。盗賊の頭と、ヒュンケル、マァム。３人の周囲だけが明るくなった。
　ヒュンケルが身構えたのに気付き、頭は彼に説明をした。
「俺の魔法力ではこの範囲が限界だ。森の射手をいぶりだすことはできない。安心してくれ。
　ただ、顔を見て話をした方がよさそうだと思っただけだ。」
　その言葉に、マァムが頷いた。魔法をある程度使える彼女は、頭の言葉が嘘ではないとわかっていた。
　彼は、まっすぐにヒュンケルを見ると、短く言葉を投げかけた。
「要求はなんだ。」
　だが、ヒュンケルは、その言葉を切り捨てた。

「要求など何もない。俺はお前たちに警告をしに来ただけだ。」
「警告・・・？」
　盗賊の頭が、いぶかしげに眉をひそめる。
　ヒュンケルは言葉をつづけた。
「間もなく、ここにロモス軍がやってくる。捕縛されたくなければ、早々に立ち去るがいい。」
　声をあげたのは、背後の手下たちだった。
「ロモス軍だと・・・？」
「馬鹿な！何故そんなことが言える！！」
　ヒュンケルは、彼らにも聞こえるように声をあげた。
「俺たちの仲間が、すでにロモス王都に走っている。相手は騎兵だ。数時間もすれば到着するだろう。」
　盗賊たちにざわめきが起こった。誰かが、その動揺を打ち消すように声をあげた。
「はったりだ！田舎村の住人の一言で軍が動くか！」
「黙っていろ！」
　だが、彼らの頭目が、その言葉を制した。
　彼は、ヒュンケルに向いたまま、はっきりとした声で、一つの約束をした。
「・・・わかった。すぐにここを発とう。」
　驚いたのは、手下たちの方だった。
「お頭！？」
「お前たち、早く準備しろ！」
「で、でも・・・。」
「いいからやれ！」
　彼はヒュンケルに尋ねた。
「何故、俺たちがここにいると気付いた？」
　その言葉は、ヒュンケルが、偶然彼らを見つけたのではないことはわかっていると、語っていた。
　ヒュンケルは短く答えた。
「靴だ。」
「靴？」
「足の裏にいくつもの鋲（びょう）が入ったような、軍靴に近い靴

を履く者など、この付近の住人ではない。それは、荒れ地を遠距離、旅する者の靴だ。
　そんな足跡が森の中にいくつもあるなど、不自然極まりない。」
「・・・そういうことか。」
　盗賊の頭は、感嘆の声を漏らした。
　そして、ヒュンケルの言葉に、彼は確信した。
　彼は、ヒュンケルから視線を外さないまま、呟いた。
「どうやら俺たちは、虎の巣に手を突っ込んでいたようだ。」
　頭は、レミーラの光に照らされたヒュンケルの面を見た。輝く銀の髪が、呪文の光で露わになっていた。
　手下たちがその言葉の意味をつかめずにいる中、盗賊の頭は、思い出すように言葉をつづけた。
「・・・銀の髪に、光の闘気の剣士。それなりに修羅場をくぐってきた者なら、思い当たる名もある。」
　彼は、ヒュンケルに向かい尋ねた。だが、それは、質問ではなく、確認にすぎなかった。
「大勇者アバンの第一使徒にして、魔王軍不死騎団長。
　魔剣戦士ヒュンケルとは、あんたのことだな。」
「悪党に名乗る名などない。立ち去れ。」
　ヒュンケルは答えなかった。だが否定もしなかった。
　頭は、苦笑をすると、ヒュンケルに一礼して踵を返した。
「こんなところにいようとはな。俺たちは運が悪かった。」
　そして、そのまま、彼は手下の男たちに撤収を指示した。
　無論、マァムが最後までかばっていた少女たちのテントには、一切、手をつけなかった。

　ヒュンケルは、盗賊たちの撤収を監視し、その後も、ロモス軍の到着まで、現地に残っていた。
　彼は、ロモス軍が到着すると、事情を説明し、盗賊の一群が向かった方角と彼らの特徴を伝えた。

　それらが終わって、彼がネイル村に戻ったときには、もう夜中になっていた。

ヒュンケルが自宅に戻ると、マァムが彼を出迎えた。
「ヒュンケル！よかった。」
「マァム。起きてたのか。」
　マァムの背後には、ネイル村の若者たちがいた。彼らはそれぞれリビングの椅子に座り、ヒュンケルの帰りを待っていた。
　ヒュンケルは、彼らの名を呼んだ。
「アレク、シモン、コンラート。
　今日は助かった。感謝する。」
　すると、アレクがヒュンケルに尋ねた。
「ヒュンケル、お前の方はどうなったんだ？」
「ロモス軍に引き継いできた。事情は説明した。彼らが逃げた方角も知らせたから、そのうち捕まるだろう。」
「早かったな。」
「ああ、思ったよりも到着が早かった。
　ずいぶん急がせてくれたんだな、コンラート。
　ありがとう。」
　そう言って、ヒュンケルは、あどけなさの残る青年に向き直った。
　その言葉に、コンラートは、照れたようにはにかんだ。
　彼はまだ若いが、このネイル村の長老の孫だ。人の話をよく聞くし、偉ぶったところのない素直な若者だ。いずれ、長老の代わりにこの村をまとめていくのだろう。
　コンラートは、照れながらも、言葉を返した。
「いいえ。ヒュンケルとマァムの名前を出したらすぐにでしたよ。マァムの身が危ない、ヒュンケルがこう説明しているって言ったら、それは大変だってすぐになって。ロモス軍の動きは早かったですね。」
「すぐに通してもらえたのか。」
「ええ。もともと兵舎には、森の警備の関係で、話をしに行ったことがありましたから。」
「そうだったな。」
　もちろん、だからこそ、わざわざ彼を派遣したのだ。話がすぐに

通るようにと。
　頷きながら、ヒュンケルは言葉を返した。
「俺たちであの一団を捕えて軍に引き渡すのは難しかった。早々に追ってもらえて助かった。」
　次に、ヒュンケルは、マァムに尋ねた。
「マァム、女の子たちは大丈夫か？」
「母さんが見てくれているわ。今日は落ち着かせる方が先決だから、とにかく寝かせるって、母さんが。
　ダナとイレナもついていてくれてる。」
　マァムは、友人の女性二人の名前をあげた。
「ああ、二人が現場に来てくれていたからな。女性がいてよかった。」
　ヒュンケルがそう言うと、マァムは、それが聞きたかったと言わんばかりに彼に尋ねた。
「私も驚いたわ。ヒュンケル、いつの間にあんな作戦考えたの？」
　ヒュンケルは、淡々とマァムに説明をした。それは、アレク達、現場に出向いた者たちにした説明と同じだった。
「あいつらの潜んでいるおおよその場所は、わかっていた。自然に立ち去ってくれればいいと思っていたんだが・・・。」
　マァムは、ヒュンケルと盗賊の頭の会話を思い出しながら彼に尋ねた。
「知っていたの？足跡で？」
　ヒュンケルは頷いた。
「ああ。
　盗賊団との確信はなかったが、まともな集団ではないだろうとは思ってた。
　それにあのあたりの地形も把握していた。姿を隠すなら、土地が下がっているところがいいと考えるだろうな、と。
　だが、彼らにとっては、今回はそれがあだになった。」
「どういうこと？」
「土地が下がっているということは、高所からの攻撃に弱いということだ。
　この森で、そんな攻撃を受けるとは思わなかったのだろう。それ

を逆手に取った。」
「あ、だから、弓だったの。」
　ヒュンケルは首を縦に振り、言葉をつづけた。
「殲滅が目的ではなかったからな。いち早く、彼らに立ち去ってもらうには、こちらを大きく見せる必要があった。
　シモンが集めてくれたのがよかった。まさか、１０人程度だったとは、それも女性も入っていたとは、彼らも思わなかっただろう。」
　ヒュンケルがそう言うと、シモンも嬉しそうに笑みを浮かべた。
　あのとき、ヒュンケルは、シモンに集めてもらった１０人程度のネイル村の若者を森の中に配置した。ある者は、少し離れた隆起した地面の上に、ある者は木の上に。その中には、女性のダナやイレナの姿もあった。そうして、ヒュンケルの合図で一斉に弓を引き、矢を射かけるようにと指示をしていたのだ。
　その合図が、空へと放った闘気弾だった。
　いまのヒュンケルではグランドクルス級の闘気を連発させることは難しい。その代わりに、本来の使い方である、「小さく放つ」闘気を使った。
　ヒュンケルの説明に、アレクも頷いた。
「ヒュンケルに、精度はどうでもいいと言われたときは意味が分からなかったが、こういうことだったとはな。
　俺も久しぶりに弓を引いた。」
「かく乱が目的だったから、矢が飛びさえすればよかったんだ。」
「うまく行ってよかった。」
　ヒュンケルとアレクが言葉を交わしていると、シモンが口をはさんだ。
「でもさあ・・・。」
　皆の視線が彼に集まる。
「俺、今まで、俺たちはマァムとかと違って、何の訓練もしてないし、強くもないから、って思ってた。
　それは事実なんだけどさ、だから、マァムが警備をやってくれてて、マァム強いからなって、そこに何の疑問もなかった。
　でもさあ・・・。」

シモンはそこで言葉を区切ると、感慨深げにつぶやいた。
「俺たちでも、村を守れるんだな・・・。」
　アレクがシモンの頭を軽くたたき、いさめた。
「俺たちは、ヒュンケルの言うとおりにしただけだろ。」
「それでもだよ！それでも、こんな風に盗賊団を追い払うことができるなんて思わなかったんだ。
　だって、あいつら、３０人？もっとか？そのくらいいただろう？
　そんなの追い払うなんて、絶対無理だって、今までだったら思うだろう？
　だから。」
　そうしてシモンは、また、言葉を区切ると、うっすらと目に涙を浮かべ、呟いた。
「だから・・・俺たちでも村を守れるんだって思って・・・。
　・・・うれしかったんだ・・・。」
　その言葉に、アレクも、コンラートも頷いた。
「そうだな・・・。」
「ええ、そうですね。」
　ヒュンケルは、穏やかな笑みを浮かべると、彼らに感謝を伝えた。謝辞を述べる。
「ああ、そうだ。
　今日のことは、皆のおかげだ。
　ありがとう。」
　その言葉を受けた、村の若者たちの面には、誇らしげな笑顔が上っていた。

　アレクたちが帰宅すると、マァムはヒュンケルとともに、２階の寝室に上がった。
　マァムは寝室でベッドの縁に腰をかけた。大きくため息をつく。
　すると、ヒュンケルも彼女の左隣に腰かけた。
「今日は疲れただろう。もう休もう。」
「うん・・・。」
　マァムの返事は浮かなかった。彼女は、ヒュンケルに対し、申し訳なさを感じていた。

マァムは顔を上げ、思い切って彼に尋ねた。
「ヒュンケル、怒ってないの？」
　すると、ヒュンケルは不思議そうな顔で彼女を見つめた。
「何故だ？」
「・・・だって、私が一人で先に行っちゃったから・・・。」
　マァムがそう言うと、むしろヒュンケルが顔を曇らせ、申し訳なさそうな表情を浮かべた。
「いや、むしろ、お前が突入する前に見つけられなくて済まなかった。その前に合流できればよかったんだが。」
「そんなの無理よ。だって、私、隠れてたから。」
　マァムは食い気味に反論した。そして、いっそう眉根を寄せ、下を向いて呟いた。
「・・・ごめんなさい。心配したわよね。」
　すると、ヒュンケルは、右手でゆっくりと彼女の髪を撫でた。
「・・・ああ。でも、お前の気持ちもわかる。」
　そのまま、穏やかな声で、マァムに語り掛けた。
「助けたかったんだろう？エリカを。彼女だけじゃない、他の女の子たちも。」
「・・・うん・・・。」
　マァムはうなずいた。
　ヒュンケルは言葉をつづけた。
「マァム、お前は強い。この村で一番強い。
　体を壊した俺よりも、あの頃の強さを維持しているお前の方が、武力で優っているのは俺にもわかる。
　お前から見たら、俺も、村の者たちも、頼りないことだろう。」
「・・・そんなこと・・・。」
　マァムは顔をあげた。
　彼女が首を横に降ろうとすると、ヒュンケルは、彼女の目をまっすぐに見て、語り掛けた。
「俺も、村の者たちも、皆、お前のように戦うことはできない。
　だが、マァム、俺たちは、違う戦い方ならできる。」
「・・・違う、戦い方・・・。」
　マァムのつぶやきにヒュンケルも頷いた。

「ああ。今日にしてもそうだ。
　力が弱く、戦う訓練を受けていない村の者達でも、今回のように、自分たちを大きく見せ、相手をかく乱させることはできる。それが、彼らの自信にもつながった。」
　マァムは、誇らしげなシモンの表情を思い浮かべた。俺たちでも村を守ることができるんだと言った彼の表情は、自信と感慨に満ちていた。
　ヒュンケルは、言葉をつづけた。
「だからマァム、もっと俺たちを頼っていい。
　お前から見たら、不十分な力しか持たない俺や村の者達でも、こうやって、他の戦い方でお前の力になることができる。
　お前は村の皆の誇りだ。
　お前のためなら、皆、喜んで力を貸してくれるさ。
　もちろん、俺もな。」
　そう言って、ヒュンケルは、いたずらめいた笑みを最後の言葉に沿えた。
　マァムは、胸が熱くなった。
　今まで胸に秘めていたこと、ヒュンケルの誇りを傷つけるのではないかと思い言えなかった言葉があった。
　いまなら、それが言えそうな気がした。
　マァムは、思いの丈を言葉とともに吐き出した。
「・・・私・・・村を守りたかったの・・・村のみんなを・・・。
　それに、私・・・あなたのことも・・・。」
　守りたかった。
　その言葉は、涙ににじんで消えていった。
　だが、言葉にならなかったその思いは、ヒュンケルには伝わったようだった。
　ヒュンケルは、また、マァムの髪を撫でながら、言葉を紡いだ。
「ああ。お前の気持ちはわかっている。
　それは嬉しい。
　お前は強い。この村の誰よりも強い。
　だが、お前がすべてを背負うことはないんだ。」
　そうして、ヒュンケルは、マァムの肩に手を触れると、こう言っ

た。
「マァム、後ろを向いてくれないか。」
　不思議に思いつつも、マァムはベッドの縁に腰掛けたまま、ヒュンケルに背を向けた。すると、マァムの両肩を大きな手が包んだ。
　ヒュンケルは、彼女の両肩に手を添え、癒すように、その双肩をゆっくりと揉んでいった。
　いままで、一身に村の安全を乗せていた、その小さな肩を。
　温かなぬくもりと、癒すように流れ込んでくる力。その言葉に乗せて、ヒュンケルの声が聞こえた。
「マァム、肩の力を抜いて、楽にしてくれ。」
　記憶の底から、同じ言葉が響いてきた。
　同じ台詞、同じ温もり。
　あれは、いつのことだったのか。
　随分前に、同じ想いを聞いた気がした。
　マァムはしばし、その心地よさに身を委ねていた。
　次第に、マァムの目じりに涙が浮かび、それがつうと頬に伝った。
「・・・私、守っていたつもりだったのに・・・本当は、あなたに・・・ううん、みんなに守られていたのね・・・。」
　しかし、ヒュンケルは、その言葉に首を横に振った。
「いや、そんなことはないさ。お前はちゃんと、この村のことを守ってくれた。
　もちろん、俺のこともな。
　お前がいるから、俺はここに、この村にいるんだ。
　それは、お前のおかげだ。」
　そうして、彼は、言葉を区切ると、マァムに告げた。
「ただ、俺もお前の力になりたい。それだけだ。」
　ヒュンケルの大きな両手が、マァムの肩から離れた。
　彼は、両腕でマァムを抱き寄せると、その身体を腕の中に収めた。
　耳元で、もうどれだけ告げたかわからない言葉を、ささやいた。
「何度でも言わせてくれ。
　お前を愛している、マァム。」

彼の腕に抱かれ、温かさに包まれながら、マァムは、呟いた。
「・・・私も。」
　その温もりが、彼女を想う気持ちが、流れ込む。
　かつてない安心感に包まれ、マァムは思った。
　私は、一人ではないのだ、と。

　彼女を包む彼の腕が、この村を守るように枝を広げていた、教会の樫の木に重なった。
　神の力が宿ると言われる樫の木。
　この村に長く植えられているあの霊木は、いまこのときも、この村を、そして、この二人を包み、静かにネイル村の更け往く夜を見守っていた。

終

気にしなくても問題ない裏設定集

ここまでお読みいただきありがとうございました！

何故、私の作品ではヒュンケルがネイル村にいるのか、彼は戦士としてはどうなっているのか、何故レイラではなくマァムが村を守っていたのか、これまでも自分なりに決めていた設定や理解を盛り込んで作ったのがこの物語です。
そして、マァムにかけたかった言葉をかけられたので、作者としては満足しています。
自己満足この上ないですが、少しでもお楽しみいただけましたら幸いです。

今回は人手不足につき、モブが盛りだくさんで申し訳ないです。
これまでのほかの話とのつながりを出すために、一部のモブについては、すでに他のお話で登場した子に肉付けして登場させています。
ご参考までに、他のお話に登場しているモブについては、（会話の

中で存在が出ているものも含めて）下記のとおりです。

「あるべき未来に進むために」7
（https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15406332）
　アレク
「初恋のゆくえーside Maam」（https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16264257）
　ダナ、マクシム、イレナ、レネー、ルカーシュ（登場順）
「賢者のお告げ」（https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16772511）
　ダナ
「アーモンドの花」（https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16935786）
　ダナ、イレナ

弓兵隊１０人（シモンを除いて１０人いた）については、名前や年齢、立場を決めてはいたのですが、全員を出すとややこしくなるので、登場を制限しました。またどこかで出て来るやもしれません（待て）。

独自色の強いお話で恐縮でしたが、ここまでお読みくださってありがとうございました！